令和５年度

道　徳

会報　Ｎｏ．19

夢に向かって
自分らしく
生きる子どもたち

「学びのコンパス」に基づいた
授業づくりを提案！！

名古屋市道徳研究会

は　じ　め　に

「どうして５分で分かることを４５分もかけて教えるのだろう。授業がつまらない。」
――――――― 前人未踏の八冠を達成した天才棋士、藤井聡太さんの言葉です。
この言葉を聞いた小学校４年生のときの担任の先生は、「５分で分かる子もいれば、２時間かけても分からない子もいるからだよ。」と説明し、藤井さんは納得したそうです。

さて、みなさんの道徳の授業、「５分で分かる授業」になっていませんか。
「今日は『思いやり』の授業か。『困っている人がいたら助けたい』と言えばいいんだな。」なんて子どもに見透かされ、その通りに発表すれば褒められる授業なんて、５分どころか、分かり切ったことを言うだけの「つまらない」授業です。
では、「つまらない」ではなく、「楽しい」道徳の授業とはどんな授業か。
それは、「自分の考えがアップデートされる授業」です。
「友達が困っていたら助ければいいと思っていたけれど、本当にそれが相手のためになるか考える必要があるな。」など、授業を通して道徳的な価値に対する考えが広がったり深まったりする、「アップデート」が起こることが「楽しい」授業の条件だと思います。

道徳科で扱う内容項目はすべて、一生かけて考えていくものです。
「本当の友情とは？」「命はなぜ大切か？」　そして、「よりよく生きるとは？」…
藤井さんのような聡明な子どもであっても、「５分で分かる」ものなどありません。発達段階に応じてじっくり時間をかけて考え、話し合い、少しずつ学びを深めていく（アップデート）、そんな授業が求められます。

名古屋市道徳研究会は、「子どもたちが本気で考える授業をしたい！」という、熱い思いをもった教員の集まりです。月に１度、数十人の研究部員が教育館に集まり、そのたびに部員の力量は「アップデート」され、子どもたちの「笑顔と学び」につながっています。
今年度は、子どもたちの問題意識に焦点を当てた授業展開を考える「授業づくり研究部会」と、子どもたちが自分との関わりで考えることができるような授業の組み立てを考える「テーマ研究部会」に分かれて研究を進めてきました。その研究の成果をまとめたものがこの会報です。部員が自分の学校で実際に実践した授業展開例を多数載せています。この会報が、みなさんの授業実践に役立てられれば、こんなにうれしいことはありません。
本研究会の研究推進と会報の刊行に際し、ご指導、ご協力をいただきました皆様方に心より感謝申し上げます。

令和６年１月

名古屋市道徳研究会顧問
名古屋市立大高中学校長
服　部　　豊

目　　次

は　じ　め　に

令和５年度　名古屋市道徳研究会　全体テーマ・・・・・ p. 1

授業づくり研究部会　・・・・・・・・ p. 2

合同学習会　・・・・・・・・ p.13

テーマ研究部会　・・・・・・・・ p.16

本年度のあゆみ　・・・・・・・・ p.27

あ　と　が　き

令和５年度　名古屋市道徳研究会

１　全体テーマ

夢に向かって自分らしく生きる子どもたち

２　テーマの主旨

日々の生活の中で、子どもたちは明るい笑顔を見せます。また、子どもたち一人一人が夢に向かって、目を輝かせながらひたむきに努力する姿に、私たちは人間としての美しさを感じます。このような夢に向かって自分らしく生きる子どもたちの姿は、未来への希望そのものです。そして、教師や保護者、地域の人々は、このような子どもたちの姿にふれ、明日への活力をもらうこともあるはずです。私たちは、子どもたち一人一人が笑顔を絶やすことなく、夢に向かって日々歩み続けてほしいと願っています。

さて、「特別の教科　道徳」（以降、「道徳科」）は、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標としています。道徳教育の要となる道徳科の授業は、全ての子どもが、仲間とともに学び合う中でこれからの生き方を思い描く時間です。学級の子どもたちは、興味・関心や生活環境等により、得意なことや苦手なことが違ったり、考え方が違ったりと実態が異なります。道徳科の授業に対しても、「友達と考えを議論することが楽しい」「いろいろな考えを知ることができてうれしい」と感じて、多くの学びを得ている子どもがいる一方、「話の内容が、自分とどう関わっているのか分からなかった」「何について話し合っているのか分からなくなった」などと、道徳科の授業のねらいに向かわず、道徳科の授業に難しさを感じている子どももいるのではないでしょうか。

私たちは、道徳科の授業を全ての子どもたちにとって、自分の生き方について考えることができる時間にするため、子どもたちの実態に応じた工夫を取り入れた研究を進めていくことが必要であると考えました。今年度は、子どもたちの問題意識に焦点を当てた授業展開を考える「授業づくり研究部会」と、子どもたちが自分との関わりで考えることができるような授業の組み立てを考える「テーマ研究部会」の二つの部会に分かれて、それぞれ研究に取り組むことにしました。

今年度も、私たち名古屋市道徳研究会は、道徳教育を通して一人一人の子どもたちが目を輝かせ、人としてよりよく生きていこうと考える姿を「夢に向かって自分らしく生きる姿」と捉え、実践を積み重ねていきたいと考えています。

授業づくり研究部会

「なんでだろう？考えたい」と思える道徳科の授業
― 子どもの問題意識に焦点を当てて ―

Ⅰ テーマ設定の理由

道徳の授業は、よりよく生きる上での大切なことの再確認や新発見をする授業だと考えます。その考えの下、「友達の考えから気付いたことや考えたことを基に、活発に議論して自分の考えを見つめ直し、今までよりも深く考えた自分なりの意見をもってほしい」という思いで、昨年度、「誰もが自分らしい考えをもつことができる道徳科の授業」を主題として研究を行いました。

「『こうするとよいと思う』と行動面について考えてしまう」という子どもの実態を受けて、「あえて行動を選択し、その理由について議論できるようにする」などの手立てを講じることで活発な議論になり、今までよりも深く考えることができました。

そこで今年度は、さらに子どもたち一人一人が自分の生き方を考えられるように、授業の始めに「あれ？なんでだろう？」と子ども自らが問題意識をもつことができるようにします。その上で、昨年度に引き続き、「議論を広げるための工夫」を取り入れた実践に取り組みたいと考えました。そして、子どもたちが「授業が終わっても考え続けたい」と思えるような、問題意識に焦点を当てた道徳科の授業を目指したいと考えました。

Ⅱ 「考えたい」と思いながら議論できるようにするために

子どもは、自ら「考えたい」と思って議論しているのかな？

昨年度、本部会は、班に分かれて授業実践について話し合いました。授業実践後の検討会を行う中で、部員から上のような声が上がりました。活発な議論となるように工夫して授業実践に取り組んだことで、子どもたち一人一人の考えに深まりは見られました。しかし、議論の内容がねらいからそれてしまう場面や、時間を持て余してしまう姿も見られることがありました。これは、教師が、子どもたちの「考えたい」という気持ちをあまり高められない中で議論を行ったため、多様な考えが出なかったからではないかと考えました。

また、教師の範読や発問を聞いた後、次のようなつぶやきや記述が見られました。

「親切にする」とは、相手によって違うのかな。どうだろう。

どうして、主人公はあのような行動をとったのかな。

子どもたち一人一人の問題意識は様々です。しかし、子どもが感じたことを授業に生かすことが何よりも子どもの「考えたい」という意欲につながると考えました。

そこで、子どもが問題意識をもち、自ら「考えたい」という気持ちを高める「導入」と、その高まった気持ちを十分に生かすことができる「議論を広げるための工夫」を関連させることに重点を置いた授業展開を考えていきました。

Ⅲ　子どもが問題意識をもっているとは

どの学習を進めるにあたっても、必要なものは、「子どもの問題意識」だと思います。では、どのようなときに子どもは問題意識をもつのでしょうか。「子どもが『当たり前』だと思っていたことが、教師の発問や場面提示によって当たり前ではなかったと感じたとき」、「教材を読んで、自分の考えとの相違に気付いたとき」などの意見が部会で出されました。

Ⅳ　なぜ、議論をする必要があるのでしょうか

道徳科の授業は、その授業のねらいはありますが、他教科とは異なり、到達目標はありません。「こうだと思う」「この考えが一番いいかもしれない」という一人一人違った自分らしい考えをもつことが重要です。そのためには、道徳科の授業における様々な議論を通して、多様な考えに触れることが大切です。よって、教師は、児童が自分自身との関わりの中で、多面的・多角的に考えられる発問や展開で授業を組み立てていくことが求められます。

以上Ⅲ・Ⅳのような理由から、本部会は、以下のような手立てを考えました。

導入

- 事前に教材を読み、みんなで考えたいと思ったことを発表する。
- 動画や写真、具体物を見て、自分はどう思ったかを発表する。
- 自分たちで、その時間のめあてを考える。
- 選択肢の中から、自分に当てはまるものを選び、友達と比較する。
- 身近な事柄について、自分はどう思うかを発表する。

議論を広げるための工夫

- 複数の発問から考えたいものを選択し、友達と話し合う。
- 自分の考えを数値化し、その数値と理由を発表する。
- 主人公がどのような言葉を掛けるかを選択して、その理由を考える。
- 思考ツールを活用し、考えを可視化したものを基に友達と話し合う。
- ペア→小グループ→全体と、人数を増やして、考えを話し合う。

↓

問題意識に焦点を当てた授業

次ページからは、「導入」「議論を広げるための工夫」を意識して組み立てた「『なんでだろう？考えたい』と思える道徳科の授業」の実践を紹介します。

Ⅴ　実践の様子

実践例①
主題名

友 達 と は

小学６年生
Ｂ　友情、信頼

【教材名】コスモスの花（出典：きみがいちばんひかるとき　６年　光村図書）

【ねらい】

いつもは目立たない北山が友達から称賛されたことを快く思えない「ぼく」の姿を通して、友達についての考えをアップデートし、仲間同士の相互の信頼の下、互いの存在を認め、応援し合えるような友達関係を築いていこうとする心情を高めるようにする。

【教材の概要】

ぼくと北山は気が合う友達同士。何でもできるぼくは、いつも目立たない北山を手助けしている。

⇒

ある日、花を生けることが上手な北山がクラスで注目される存在となり、ぼくは北山に対して嫉妬心を抱く。

⇒

「北山は注目されて調子にのっている」と陰口を言う周囲に対し、ぼくは思わず「やめろよ」と叫ぶ。

【本時の終わりに期待される具体的な子どもの姿・考え】

最初、友達とは「一緒にいて好きなものが同じ子」だと思っていました。今日の授業を通して、友達とは「お互いの性格を受け入れて応援し合う関係」だと感じました。

導入の工夫

○　教材を読んだ子どもの感想の紹介し、「問い」を立てる

「教材を読み、教師が一方的に子どもに発問をして、子どもが考え、答える」このような活動の流れでは、子どもが本気で「考えたい」と思うことができず、子どもの活動が受け身になってしまうことがあります。そこで、事前に教材を読み、考えてみたいことや引っかかったことなどの感想を教師に提出するようにします。そして、教師が感想を紹介し、子どもと教師が対話しながら、本時で考えられる「問い」を立てる活動を取り入れます。そうすることで、子どもが本気で「考えてみたい」と思い、主体的な活動へとつながっていくと考えました。

議論を生み出すための工夫

○　複数の「問い」の中から、考えたい「問い」を子どもが選択する

感想を紹介しながら複数の問いを立て、その中から子どもたちが各自考えてみたいものを選択するようにします。そうすることで、より多くの子どもが考えをもつことができ、議論が活発になると考えました。

○　議論の方法を子どもが選択する

考える「問い」を選択したら、次は議論する方法を子どもが選択します。具体的には、誰と何人で議論するかを選びます。さらに、議論するだけでなく、黒板に自分の考えを板書することや、一人でじっくりと考えてから議論するなど、活動の選択肢を多く示し、子どもが目的をもって活動できるようにします。

○　自分の考えを数値化し、その数値と理由を発表する

全体で考えを深める場面では、「どのくらい友達と言えるか」を 10 段階の数値で考えることで、議論をさらに活発にできると考えました。

【学習の過程】（T…教師、C…子ども）

事前活動

○　教材を読んで、感想を提出する。

教材を読んだ感想を書きましょう。

導入

○　教材を読んだ子どもの感想を紹介し、「問い」を立てる。

T：この教材を読んで書いた感想をみんなで見ていきましょう。

【子どもたちの感想と、その感想を基に立てた問い】

ぼくは、何もできない北山を助けているからいい人だと思う	ぼくは、何でもできていつも調子に乗っていた。	**北山はみんなに話しかけられてずるいと思ったのではないか。**	「北山なんて」という気持ちにはどんな思いが込められているのか気になった	「次のサッカーのとき、顔めがけて思いっ切りボールをけってやるか」という声は、だめだと思った。	北山のことをバカにしている人に、「やめろよ。」と声を出してかばってくれてるのは、すごいとおもった。
↓		↓		↓	
問A：ぼくは、どのような思いで「もっと、がんばれよ」と言ったのか。		問B：「北山なんて―」に続く言葉は何か。		問C：ぼくは、どのような思いで「やめろよ！」と言ったのか。	

〈考察〉　子どもたちは、モニターに映し出される自分や友達の考えを、前のめりになりながら見つめていました。教師が、子どもたちの考えについて相違点を意識しながら提示することで、「あぁ、確かに」「それもあるかもしれない」などつぶやく姿が見られ、問いを立てることができました。

展開

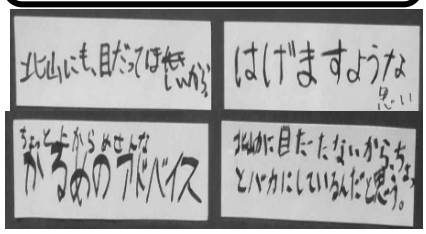
○　３つの問いのどれかを選び、対話活動をする。

話し合ってから、自分の考えをカードに書く方法を選択したグループの議論の内容	板書を見て、他の子の考えと比べながら話し合っているグループの議論の内容	一人でじっくりと考えた後、友達と話し合っている二人組の議論の内容
C：友達でなくて、上から目線。 T：応援している感じ？友達思いで優しい感じ？ C：あわれんでいる気がする。 C：軽いアドバイスとかにした方がいいよね。	C：ちょっとできたくらいで調子に乗るな。 C：何もできないのに。 C：（続く言葉のイメージについて）嫉妬している言葉が続きそうだね。	C：もやもやするけど、友達は友達だからかばえたんじゃないかな。 C：自然に声を掛けたんだと思う。 T：なぜ、自然に声を掛けられたのかな。 C：友達だから。

〈考察〉　３つの発問から、子どもが選んで考えることができるようにしたことで、自ら考えたいという気持ちをもって考えている姿が見られました。中には、一人で考えてから友達と話し合う子どももおり、一人一人がペースや方法を選ぶことができました。

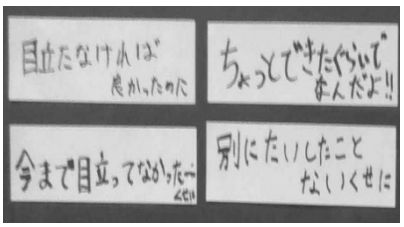
○　全体での対話活動を通して、新たな問い（中心発問）を立てる。

問Ａ：ぼくは、どのような思いで「もっと、がんばれよ」と言ったのか。



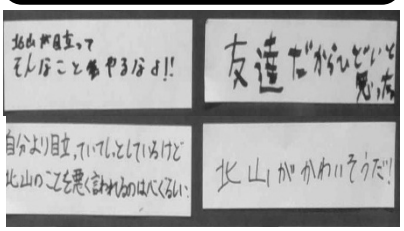
Ｔ：Ａは、いい感情や「北山を馬鹿にしている」という気持ちの両方があるんだね。

問Ｂ：「北山なんて―」に続く言葉は何か。



Ｔ：Ｂは、急に立場が変わった気がして、「マイナス」な気持ちがたくさんあるね。

問Ｃ：ぼくは、どのような思いで「やめろよ！」と言ったのか。



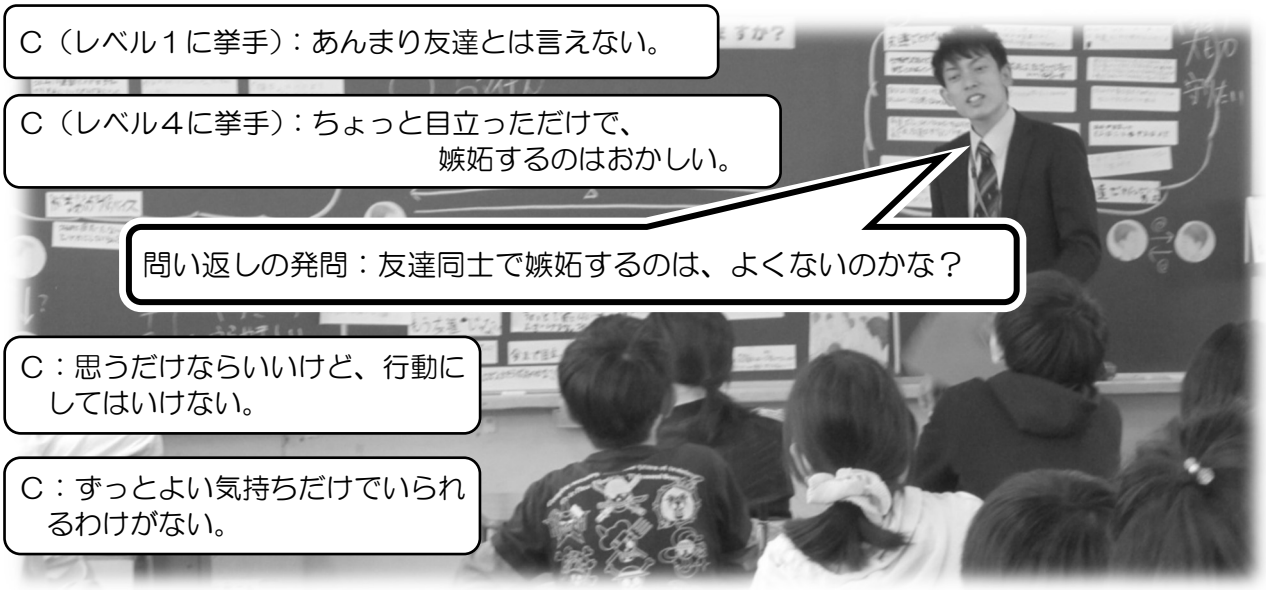
Ｔ：Ｃは、「大切」「守りたい」という気持ちがあるんだね。

中心発問＜数値を問う＞
（北山に対してマイナスの気持ちもあるけど）
二人の関係は、結局のところ「友達」と言えますか。
二人はどのくらい友達と言えるか、10 段階で表してみよう。

○　「友達」について考えを深める。

＜友達レベルとそれぞれ挙手した人数＞

１：１人	２：０人	３：０人	４：１人	５：１人
６：５人	７：４人	８：６人	９：６人	10：６人



Ｃ（レベル１に挙手）：あんまり友達とは言えない。

Ｃ（レベル４に挙手）：ちょっと目立っただけで、嫉妬するのはおかしい。

問い返しの発問：友達同士で嫉妬するのは、よくないのかな？

Ｃ：思うだけならいいけど、行動にしてはいけない。

Ｃ：ずっとよい気持ちだけでいられるわけがない。

〈考察〉　どのくらい友達と言えるかを 10 段階の数値で考えるようにすることで、自分の考えをもちやすくしました。そして、数人に理由を尋ねる中で、「嫉妬」というキーワードを取り上げ、問い返しの発問をしたことにより、さらに友達について深く考えることができた様子でした。

終末

○　「友達」という本時のテーマについて、再度考える。

T：友達について考えたことは、何ですか。

友達とは、自分の都合にあった人ではないから、いやなことがあっても当然だと思う。
いつもよい関係≒友達

「友達」とは遊んでくれたり、一緒に話してくれたりする人と思っていたけど、実はお互いに助け合っているということに気付くことができた。

〈考察〉　「友達についての考えをアップデートしよう」というめあてのもと学習を進めました。子どもは、今までもっていた「友達像」と、学習を終えて考えた「友達像」を比較しながら記述することができ、考えをアップデートすることができました。

授業研究（公開授業）の成果と課題（○：成果、●：課題）

＜導入の工夫について＞

○　教材を読んだ感想を事前に教師が把握して、その感想の中から相反する考えや多く出された考えを示した後、発問を提示したことで、子どもの「考えたい」という意欲を高めることができました。

●　今回は事前活動で感想を提出し、授業日までに教師が子どもたちの感想を確認し、授業計画を立てましたが、今後は、子どもたちの意見をより生かすために、１時間の授業時間内で、教材を読み、感想を伝え合い、問いを立てるという方法にも取り組みたいと考えます。

＜議論を生み出すための工夫について＞

○　３つの発問の中から考えたいものを選ぶようにしたことで、子どもの主体的な学びにつなげることができました。その後、３つとも全体で話し合うことで、選択しなかったものについても考えることができ、「友達」について深く考えることができました。

○　友達と話し合ってから自分の考えをまとめたり、自分の考えを整理してから友達と話し合ったりする姿が見られ、自分に合った方法で議論を広げることができたと考えます。

○　数値化し、その理由を発表することで、子どもたちが多様な考えに触れ、自分の考えと比較したり、新しい視点に気付いたりすることができました。

●　「ぼくは、どのような思いで『やめろよ！』と言ったのか」について、「友達だから、かわいそう」という考えが多く出されました。問い返しの発問に対する意見や数値化した理由から、子どもたちの言葉を引用し、友達を見下していた自分の気持ちに気付いた主人公の心情についても考えられるようにすることが大切であったと感じました。

実践例②

主題名　みんなでつかう　ものだから　小学２年生　Ｃ　規則の尊重

【教材名】黄色いベンチ（出典：きみがいちばんひかるとき　２年　光村図書）

【ねらい】

公園のベンチに土足で立って遊んだ「たかし」と「てつお」が、後からはっとする姿を通して、みんなで使うときに大切なことは何かを考えさせ、みんなが使う物を大切にしようとする実践意欲と態度を育てるようにする。

【教材の概要】

雨上がりに、「たかし」と「てつお」が、おもちゃの飛行機を飛ばしに公園へ行く。

⇨

よく飛ぶように、黄色いベンチの上に立って飛ばすことにするが、ベンチが泥だらけになる。

⇨

汚れた黄色いベンチに座った女の子を、おばあさんが拭いている姿を見て、２人は「はっ」と顔を見合わせる。

【本時の終わりに期待される具体的な子どもの姿・考え】

みんなが使う物を使うときには、きちんと片付けることが大切だと思っていたけど、遊びに夢中になっているときにも、自分だけでなく周りの人達のことも考えることが大切だと分かりました。みんなが使う物を大切にして、みんなが気持ちよく過ごせるようにしたいです。

導入の工夫

○　具体物の提示

低学年の子どもにおいては、教材理解を促したり、興味関心をもたせたりするために具体物を提示することは有効であると考えます。そこで、本時では、黄色いベンチを作成し、実際に座らせる活動を取り入れながら「ベンチ」はみんなで使う物であるという理解を促します。

○　子どもが自ら考えるめあての設定

教師がめあてを提示するのではなく、「みんなで使う物を使うときに、○○なことを考えよう」の○○に入りそうな言葉を子どもと一緒に考えることにより、本時への問題意識を高め、子どもが主体となる授業を展開できると考えます。

議論を生み出すための工夫

○　表情絵カードの活用

低学年の子どもの中には、上手に自分の考えを伝えることができない子どももいます。話合いの場面で表情絵カードを活用することで、誰もが自分の気持ちを友達に伝えることができるようになると考えます。

○　役割演技

終末の場面で、本時の授業を振り返りながら役割演技を行うことで、実践意欲が高まると考えます。役割演技では、代表の子どもが演じ、周りの子どもは観察をします。その際、周りの子どもは、代表の子どもの発言内容だけでなく、声のトーンや仕草などからも気持ちを読み取り、考えたことを発表します。これにより、議論が活発になると考えます。

導 入

○　本時のめあてを考える。

Ｔ：「みんなで使う物を使うときに、○○なことを考えよう」の○○に入りそうな言葉を考えよう。

Ｃ：大事　　Ｃ：大切　Ｃ：必要

展 開

（１）教材「黄色いベンチ」を範読し、本時で考えたいことを共有する。

Ｔ：たかしとてつおがしたことの中から、気になったところに線を引きましょう。

Ｃ：ベンチの上から飛行機を飛ばしました。

Ｃ：たかしとてつおは「はっ」として、顔を見合わせました。

（２）「はっ」としたときの、たかしとてつおの心情について考える。

Ｔ：「はっ」としたとき、二人はどんな気持ちだろう？

Ｃ：汚れたからベンチがかわいそう。

Ｃ：たかしとてつおは、「やってしまった」という気持ちだと思う。

（３）役割演技をする。

Ｔ：「あそこのベンチから飛行機を飛ばそうよ」と誘われたら、どう答えますか。

Ｃ１：ドロドロになるから靴を脱いでからやろう。

Ｃ２：靴を脱ぐと、迷惑を掛けなくていいね。

Ｃ３：次の人が嫌な気持ちになるから、違う場所で遊ぼう。

終 末

○　本時の学習を振り返り、みんなで使う物を工夫して使おうとする実践意欲を高める。

導入の工夫

○　具体物の提示

黄色いベンチを作成し、座りたい児童を募り、自由に座らせることで、本時の教材への学習意欲を高めました。

○　子どもが自ら考えるめあての設定

本時のキーワードが「みんなで使う物」と押さえた後、「みんなで使う物を使うときに、○○なことを考えよう」の○○に入りそうな言葉を子どもと考えました。出た言葉から本時の課題を設定し、本時への問題意識を高めました。

議論を生み出すための工夫

○　表情絵カードの活用

それぞれの登場人物がどのような気持ちなのかを表情絵カードで表しました。表情絵カードを１枚に限らず、自由に出し合い、近くの児童と「なぜ、そのカードにしたのか」を話し合いました。表情絵カードを使って、友達と話し合ったことで、この後の発問に対して考えやすくなり、自信をもって発表ができるようになりました。

○　役割演技

教師の「あそこのベンチから飛ばそうよ」という声掛けに対し、どのように答えるとよいかを考え、代表の子どもが役割演技を通して発表しました。演技を見た周りの子どもから出た意見により、自分とは異なる新しい考えにふれたり、自分と同じ考えがあることから自信をもったりすることができ、今後の実践意欲を高めることができました。

【実践を振り返って】

自分自身との関わりで深めたか

導入での様子を終末に振り返ったことで、自分が導入時に行った行動を見つめ直し、みんなで使う物を使うときにどんなことを考えて行動するとよいかについて、考えを深めることができました。

一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展したか

表情絵カードを使って、自分の考えを言った際、「同じだ！」と友達から共感される姿や役割演技の際、演技を見ている児童が「たしかに、それもある！」と新たな考えに気付く姿が見られました。手立てを用いて、自分の考えをもった後に議論をすることで、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展する様子が見られました。

実践例③

主題名　**正しいと思うことを**

小学４年生
Ａ　善悪の判断、自律、自由と責任

【教材名】言わなきゃ（出典：きみがいちばんひかるとき　４年　光村図書）

【ねらい】

正しいと思うことを友達に言えないでいる「わたし」の姿を通して、正しいと思うことを行うために大切なことについて考え、正しいと思ったことは、周りに流されることなく自信をもって行おうとする判断力を育てるようにする。

【教材の概要】

保育園で歌う歌を決めるとき、仲良しのゆり子はクラスではやっている曲を提案した。

⇨

ゆり子の提案にクラスの多数が賛成した。
しかし、「わたし」は別の意見を言い出せない。

⇨

歌の練習で、「わたし」は、しゃべっている人に注意したいが、ゆり子に流されて話してしまう。

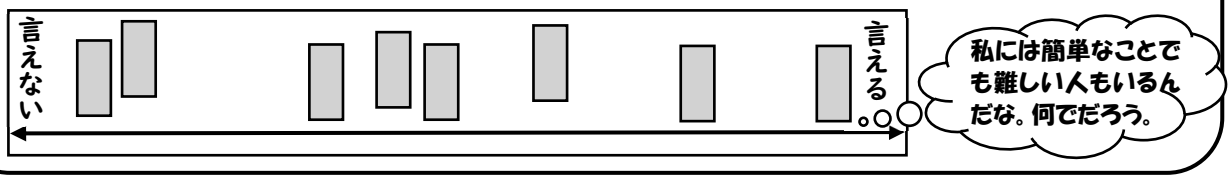
【本時の終わりに期待される具体的な子どもの姿・考え】

最初は正しいことは言うべきと考えていましたが、実行することは難しいことが分かりました。今日の学習で、自分の考えを言うとすっきりすることや相手を信じて言ってみることの大切さが分かったので、これからは、自分の考えを伝えてよりよい関係を築いていきたいです。

導入の工夫

○　心のスケール

子ども一人一人の問いに対する考えを可視化するため、スケールで表した座標軸に自分の名札を貼り、判断や迷いの度合いを表わすことができるようにします。スケール上の名札の散らばりから「なぜその位置に貼ったのか」を考えることで、自分と違う考えが多様にあることに気付き、問題意識をもてるようにします。



議論を生み出すための工夫

○　『天気カード』を活用した「なぜなぜタイム」

登場人物の気持ちを天気のイラストで表現します。天気のイラストで表現することは、文章表記と比べ、他者との考え方の違いを捉えやすいため「どうして自分と違うのだろう」や「あの子と同じ天気だから、理由を聞きたいな」などの気持ちが自然と生まれ、議論につながると考えます。

○　「出し合いタイム」

主題につながる大切な気持ちを付箋に書いた後、話し合いながら、付箋に書いた大切な気持ちをもち続けることは「簡単」か「難しい」かの２つに分けます。そうすることで「確かに大切だけど、場面によってはこういう気持ちをもてないときもある」「私にとっては、この気持ちをもち続けることは簡単だよ。だって…」などと議論が生まれ、議論の中で自分と関わらせて考えることができます。

導 入

○　正しいと思うことを誰に対しても言うことができるか考える。

Ｔ：仲のよい友達に正しいことを言えますか。言えませんか。

Ｃ：仲のいい友達なら正直に伝えてもけんかをすることはないと思う。

Ｃ：嫌われたくないから言えない。

展 開

○「わたし」の気持ちについて考える。

Ｔ：「言わなきゃ」と思っていることが言い出せなかったとき、どんな気持ちだったでしょう。

Ｃ：言えばよかったと後悔している。

Ｃ：自分が他の人に何か言われそうで怖い。

Ｔ：わたしの心はどんな天気だったのでしょうか。

Ｃ１：何回も意見を言いたいのに言えない自分にイライラしているから雷。

Ｃ２：嫌われたくないから雨だと思う。

Ｃ１：Ｃ３さんは、ぼくと同じ雷だけど、どうして雲の中に雷を書いたの？

Ｃ３：自分の意見が言いたいのに言えなくて、すごくモヤモヤもイライラもしているから。雲もわざと分厚くしたよ。

Ｔ：正しいことを言うためには、どのような気持ちをもてばよいでしょう。

Ｃ４：自分の意見を言って軽い気持ちにした方がいいけど、難しいな。

Ｃ５：正しいことを言うと友達に嫌われるって決めつけると、言い出すのが難しいね。

終 末

○　学びを確認し、自分の考えを再構築する。

導入の工夫

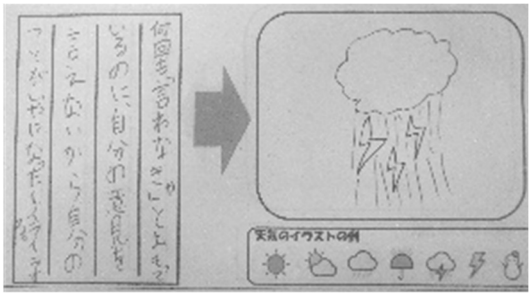
○　**心のスケール**

「言える」「言えない」を表した座標軸に自分の名札を貼りました。なぜその位置に貼ったのか理由を伝え合うことで、自分と違う考えがあることに気付き、問題意識をもつことができるようにしました。

議論を生み出すための工夫

○　**『天気カード』を活用した「なぜなぜタイム」**

正しいと思ったことを言い出せない「わたし」の気持ちを天気のイラストと文で表現しました。このようにすることで他者との考えの違いが明確になり、「なぜその天気にしたのか」と、天気のイラストをきっかけとした議論が生まれました。



【天気カード】

○　**「出し合いタイム」**

正しいと思ったことを言うために大切な気持ちを付箋に記入しました。その後、議論をしながら、付箋に書いた気持ちをもち続けることが「簡単」か「難しい」かの２つに分けました。「言った方がよいけど、行動に移すのは難しい」「言いたくても言えない気持ちは、私も分かる」「言ってみると、相手との関係がよりよくなる。相手を信じて言えば簡単」など、議論しながら、考えが深まっていく様子が見られました。

【実践を振り返って】

自分自身との関わりで深めたか

導入で心のスケールを活用したことで、普段の自分たちの考えに違いがあることに気付くことができました。また、議論の中で「私も言いたいことが言えないと不安な気持ちが大きくなっていく」「自分も意見が言えなくて、相手に合わせることがあるから、勇気を出して言えるようになりたい」と、自分自身を振り返りながら考えることができました。

一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展したか

「なぜなぜタイム」や「出し合いタイム」において、自分と異なる考えやそう考える理由にふれながら議論を行ったことで、「私は、自分の気持ちを伝えられず戸惑ってしまうけれど、友達を信じて言うことも大切だと分かった」などの考えをもつことができました。

Ⅵ　まとめ【○：成果、●：課題、→：改善点】

1　成果と課題

本部会では「『なんでだろう？考えたい』と思える道徳科の授業」をテーマに研究を進めてきました。その結果、次のような成果と課題が明らかになりました。

○　複数の問いの中から考えたい問いを選択できるようにしたことで、一人一人に合った問いを考えることができた。また、対話の方法を選択できるようにしたことで、一人一人のペースで考えを深めることができた。

○　導入時に子どもが興味を示した具体物を役割演技にも用いたことで、子どもの「話したい」という気持ちを高めることができた。

○　10 段階やスケール等で、自分の考えを数値化したり可視化したりすることで、考えが違う友達がいることを知り、「自分にない考えを聞きたい」、「自分の考えを伝えたい」と思う気持ちを高めることができた。

●　複数の問いの中から選択させたことで「考えたい」という思いをもたせることができたが、意見の伝え合いで終始してしまい、対話活動で考えが深まらなかった子どもがいた。

→　子ども同士の対話の中で、質問をし合ったり、経験を想起したりする活動があるとよかった。

●　自分の意見を可視化する際、二者択一の状況となってしまい、なかなか決めることができない子どもがいた。

→　自分の思いも友達の思いも大切にしようとする子どもが、特に困っている様子が見られた。可視化することは議論するためのきっかけであることを子どもたちに説明し、「どの辺りに来るか」など、幅をもたせて表出することができるようにしていきたい。

＜部員の声から＞

導入を工夫することで、子どもは、「なぜだろう」と振り返り、考えたいと思えるようになるのだと感じました。

授業のねらいはもちろん大切ですが、子ども主体の学習を進めるにあたり、子どもの考えや考えたいことに目を向けることも、とても重要だと感じました。

話合いの手法を考える前に「考えたい」と思えるようにすることが大事だと思いました。授業後の子どもの笑顔が増えました。

2　今後の方向性

今年度、子どもの「考えたい」という問題意識に焦点を当てて実践を重ねた結果、主体的に議論を行っている姿が数多く見られました。来年度からの名古屋市の学びの方針となる「学びのコンパス」を進めるにあたっても、大きな成果を得ることができたと感じます。今後は、子ども主体の学習が多くなる一方で、ねらいに迫るために教師として子どもに確実に考えてほしいこともあります。そのため、子どもの「考えたい」という気持ちと、教師の「考えてほしい」というねらいとのバランスが取れるような授業づくりを目指していきたいと思います。

令和5年度　合同学習会

「合同学習会」とは、授業づくり研究部会とテーマ研究部会の両部会が集まって道徳科について学習する会です。本年度は、毎回異なるテーマを設定して模擬授業を行い、部員が行った模擬授業をもとに道徳科の指導方法について学習を行っています。

第1回（５／１７）

「先人の伝記」を題材とした道徳科の授業

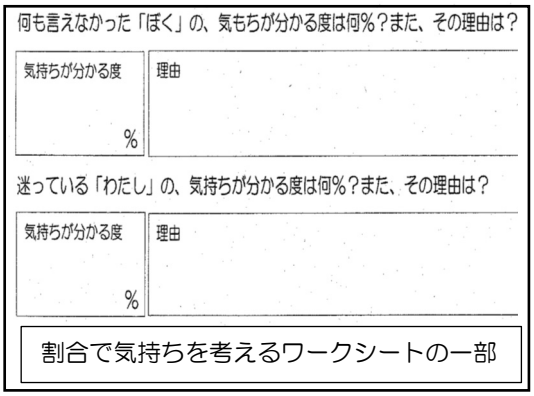
道徳科の教科書には先人の伝記を題材とした教材が多く掲載されています。そのため、先人の伝記を扱った授業の組み立てを学ぶことにはとても意義があると感じます。

子どもたちは実際の自分たちの日常生活と、先人たちの偉大な生活の間に大きな差を感じ、教材の内容を自分のことと関わらせて考えるのが難しい場面が多くあります。

第１回では、先人の伝記を扱った教材を楽しく、自分の生活と関わらせて考えるための指導方法について学びました。

第2回（６／９）

「自己を見つめる」導入の工夫



何も言えなかった「ぼく」の、気もちが分かる度は何％？また、その理由は？

気持ちが分かる度	理由
％	

迷っている「わたし」の、気持ちが分かる度は何％？また、その理由は？

気持ちが分かる度	理由
％	

割合で気持ちを考えるワークシートの一部

道徳科の学習指導要領解説には、「自己を見つめる」学習活動の大切さが記されています。

第２回では、授業の導入における「自己を見つめる」学習活動の工夫について学びました。模擬授業では、小学５年「どうすればいいのだろう」の教材を用いて、「公正・公平な態度」を学ぶための導入を考えました。模擬授業では「主人公の気持ちが分かる度」を割合で表したり、「公正・公平な態度って大切ですか？」という発問から授業を始めたりして、子どもたちが自分の生活を振り返るための方法を学びました。

第３回（７／５）

「多面的・多角的に考える」展開の工夫
「自己の生き方について考えを深める」展開の工夫

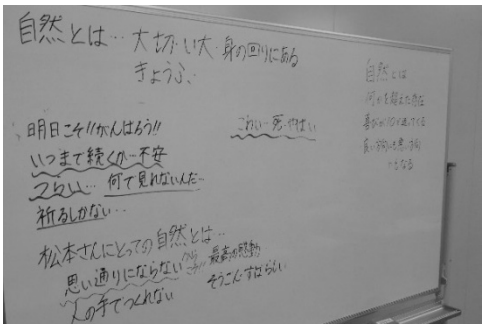
道徳科の学習指導要領解説には、「多面的・多角的に考える」「自己の生き方について考えを深める」ことが目標として記されています。

模擬授業では、自分と考えが違う人の意見を知るためのネームプレートの活用の方法や「これから自分と違う意見を大切にするときにどんなことを心掛ければいいでしょうか。」といった、これからの自分の生き方について考えを深めるための発問について学ぶことができました。また、日頃から考えが異なる人の意見を大切にするために「〇〇と△△、あなたはどっち派？」といった質問を子どもたちに投げ掛け、理由を交流し合う取り組みについても体験できました。

第４回（９／６）

「感動、畏敬の念」を題材とした道徳科の授業

「感動、畏敬の念」を題材とした道徳科の授業は難易度が高く、苦手意識をもっている先生方も多いのが現実です。第４回では中学１年「オーロラの向こうに」という自然を扱った教材を用いました。雄大な自然への感動を扱う教材では、授業の終盤で、生徒にとっての身近な自然と比較して考えさせることは、教材の内容からかけ離れてしまい、教材で感じた感動が小さくなってしまうことが留意点として上げられました。自分との関わりを考える他の教材とは異なり、実際の写真や動画等を活用して、自然に感動する世界についてどっぷりと浸かって考える大切さについても新しく知ることができました。



第5回（9／27）

「詩」を題材とした道徳科の授業

金子みすゞの詩「みんなちがって、みんないい」を教材として扱いました。詩の内容を読み取るのではなく、この詩をきっかけにして自分の個性について考える内容となりました。個性を考える際にはリフレーミング（物事の捉え方をポジティブに変換する思考方法）の手法が効果的であることを、模擬授業を通して体験しました。自分の苦手なところを書き、それらを友達によいところに変換してもらい、自分の個性について知っていく展開でした。

授業の終末では金子みすゞの詩「みんなをすきに」を紹介し、人には誰でもよさや個性があり、それを受け入れて人と関わっていく大切さについて学べるような展開が紹介されました。

【リフレーミングの例】
怒りっぽい→何事にも全力
のんびり→慎重な取り組み
気が弱い→周りを大切にする
うるさい→元気、明るい

今年度から参加された部員の声

研究会に初めて参加して緊張しましたが、部員のみなさんが優しく接してくださったおかげで楽しく過ごすことができました。模擬授業や指導案検討を通して、自分一人では思い浮かばない授業の組み立て方や発問の仕方を学ぶことができました。

明日の道徳科の授業に使える導入の工夫を学べたことがよかったです。
また、授業を考える際の、子ども観や教材観の捉え方も一から学ぶことができました。

１０月以降の合同学習会の内容

１１／　１	「国際理解、国際親善」を題材とした道徳科の授業
１２／１２	「スポーツ」を題材とした道徳科の授業
１／１０	「自然」を題材とした道徳科の授業
２／１４	地域教材（明るい心）を活用した道徳科の授業

テーマ研究部会

自分との関わりで考える道徳科の授業

― 子どもの実態に基づいた発問と終末の工夫を通して ―

Ⅰ テーマ設定の理由

昨年度は「誰もが安心して考えることができる道徳科の授業」を主題として、個別最適な支援を取り入れた研究を進めてきました。その中で、子どもたちが多面的・多角的な見方ができるようになるための支援は成果を挙げることができました。しかし、自分との関わりで考えることに対する支援については課題が残りました。

また近年、学校現場では一人一台のタブレット端末の使い方や話合いを活発化させるための指導法、学習上の困難がある子どもたちへの支援方法など、教科指導を支えるたくさんの授業実践が紹介されてきました。本研究会でも道徳科における有効な手立てについて学んできました。しかし一方で、手立ての有効性に注目していく中で、本来、授業の主役である子どもたちの実態への意識が薄くなっているという声も部員から上がってきました。授業を計画する際には、子どもたちの実態を把握し、教材でどのような力を付けさせるかを考え、ねらいを決め、発問を考えていくことが大切です。教科書に書かれている通りに発問しても子どもたちの反応がよくないように感じたり、同じ発問でも、過去に授業をしたクラスとは反応が異なったため急きょ発問を考え直したりした経験もあるかと思います。同じ教材を扱う場合でも、目の前の子どもたちの実態によって発問やねらいへのアプローチが変わってきます。

そこで本年度、テーマ研究部会では、子どもたちの実態に応じた「自分との関わりで考える」道徳科の授業を目指し、研究を進めました。改めて学習指導要領の道徳科の目標を確認し、部会内で持ち寄った各学級の実態を基に教材観、子ども観を部員同士で話し合いました。そして、子どもたちの実態に、より合った授業の組み立て方を考えました。

Ⅱ 部会での研究の進め方

本部会では、授業を計画していく上で、以下のような手順で子どもたちの実態に基づいた発問や終末をグループに分かれて考え、研究を進めてきました。

1. 道徳科の目標の再確認 ※ （ ）は中学校

道徳科の目標には「*よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己（人間として）の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる*」とあります。普段の授業がこの目標に合ったものかを振り返ります。

2. 子ども観、教材観、ねらいを考える ※18ページからの実践例に①～③の流れが記載してあります。

①子ども観･･･**【学級の子どもたちの実態】**日頃の様子を観察したり、子どもたちにアンケートを取ったりして把握します。本時で考える内容項目を指導要領解説で確認し、それに関して、子どもたちが日頃どのように考え、生活しているのかをおさえます。

②教材観　・・・【この教材でどのような心情を高めるか】選んだ教材のどの部分で、どのようなことを考えさせ、心情を高めることができるのかをおさえます。教材研究をしていく中で教材を読み、心を動かされた場面や疑問に思った場面が、中心発問の対象となることが多いです。

③ねらい　・・・①②をふまえて、本時で子どもたちにどのような力を付けさせたいのかを明確にしてねらいを立てます。

3. 発問を考える

教科書に沿って発問をしますが、子どもの実態に応じて言葉を変えたり、発問を付け足したりします。このような教師の思いからは、次のような発問が考えられます。

「自分の生き方を振り返ることができるようになってほしいなぁ」

＜自分の経験や生活を自然に想起することができるように…＞
・〇〇と聞いて、どんなことを思い浮かべますか。
・自分自身の経験と似ているところはありますか。

「相手の立場で気持ちを考えられるようになってほしいなぁ」

＜他者の視点からも考えることができるように…＞
・〇〇の立場になって気持ちを考えましょう。
・Ａさんは、Ｂさんがどう思っていると考えているでしょうか。

「自分の考えをもって授業に参加できるようになってほしいなぁ」

＜自分の考えをもちやすくするために、「選択する」活動を取り入れて…＞
・親切か、親切でないか、理由も併せて考えましょう。
・自分の考えに一番近い登場人物は誰ですか。

4. 終末の工夫を考える

授業の終わりには、子どもたちがこれからの自分の生き方について考えやすくなるように、指導の工夫を行います。

例・・・教材で登場した人物に対して、手紙を書く
本時で大切だと思ったことをポスターにして絵や言葉で考えをまとめる
本時の内容に関わりのある詩や歌にふれる

5. 模擬授業

初めに子どもの実態と本時のねらいを部会で共有し、その実態に合った発問や終末の工夫であったかを検証します。部員は子どもの実態を把握して、その子どもの立場で授業を受けます。模擬授業後には部員からの意見をもとに、よりよい授業を目指して改善を行います。

次のページからは、同じ教材でも、子どもたちの実態に応じて発問等の授業の組み立て方を変えた授業実践を掲載しています。また、小学２年生と５年生の教材を掲載していますが、どちらも内容項目が「Ｂ　親切、思いやり」です。発達段階を考慮した点についても注目してご覧ください。

小学２年生「ぐみの木と小鳥」		小学５年生「道案内」	
【子どもの実態】 自己中心的な考えの下、「親切だ」と思う行動をとってしまう。	【子どもの実態】 困っている人を見て見ぬふりをしたり、声を掛けられなかったりする。	【子どもの実態】 友達や関わりのある人に対しては親切にできる。それ以外の人との関わりには消極的。	【子どもの実態】 相手の置かれている状況を想像できず、自分本位の考えで行動してしまう。
p.18・19へ	p.20・21へ	p.22・23へ	p.24・25へ

【学級の子どもたちの実態】
自己中心的な考えの下、「親切だ」と思う行動をとってしまう

【学級の子どもたちの実態】
困っている人を見て見ぬふりをしたり、声を掛けられなかったりする

Ⅲ　実践の様子

実践例①
主題名

あいてを思いやって

小学２年生
Ｂ 親切、思いやり

【教材名】　ぐみの木と小鳥（出典：きみがいちばんひかるとき ２年　光村図書）

【教材の概要】

山の上に立つぐみの木が小鳥に「りすがこの頃、姿を見せない」と話す。

⇨

ぐみの木に代わり、小鳥がりすの様子を見に行くと、りすは病気で寝ていた。小鳥は翌日もりすを訪ねる。

⇨

さらに翌日、嵐の中、小鳥は力を振り絞り、りすにぐみを届けた。りすは感謝し、ぐみの木も、小鳥がしたことは忘れないと言う。

【学級の子どもたちの実態】

子どもたちは、避難訓練や防犯訓練を通して、緊急時にどのような行動をすればよいか学び、自分の身は自分で守ることの大切さを知っている。また、いかなる場合においても「親切をすることはよいことだ」という認識をもっている。しかし、そのよかれと思った親切な行動は、「自分がそうしたいから」という自己中心的な考えが基になっていることが多い。

【この教材でどのような心情を高めるか】

嵐の中、病気のりすに約束をしたとはいえ、ぐみの実を届けようとする小鳥に対して、今の状況では届けない方が得策であることを児童は理解しています。ぐみの実を届けることで、自分の身が危険になることになり、「嵐が止んでからにしてほしい」と言ったぐみの木やりすにも心配を掛けることになるからです。

したがって、小鳥を取り巻くぐみの木やりすに焦点を当てながら、彼らの思いを考えることを通して、小鳥は嵐の中、無事にりすのもとへぐみの実を届けることはできたが、ぐみの木やりすにも心配を掛けないことを考えることも、親切であることに気付かせます。

【本時のねらい】

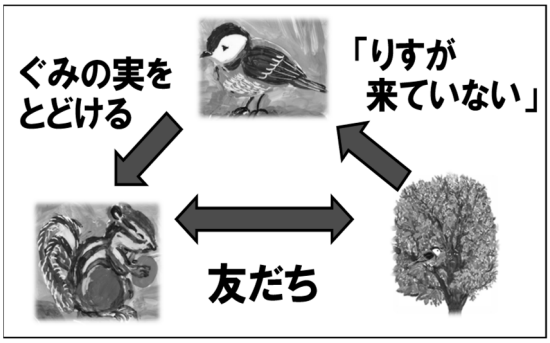
病気のりすに、ぐみの実を届けようとする小鳥と、嵐が止んでから届けてほしいと心配するぐみの木とのやりとりから、小鳥のぐみの実を届けようとする思いやりと相手に心配を掛けない思いやりがあることを理解させ、相手を思いやる気持ちを高める。

【自分との関わりで考える工夫】 Point

○　関係図の活用

登場人物が多い本教材では「小鳥」、「りす」、「ぐみの木」の関係を表す簡単な図を 45 分間通して常時提示しておきます。どの登場人物の気持ちを考えているか、関係図を示しながら発問します。

そして、子どもたちの発言を関係図に書き込むことで、終末では関係図を見ながら、思いやりについて学んだことを振り返りやすくします。



【教材の人物の関係図】

【実践について】(C…子ども　T…教師)

＜授業の流れ＞

導　入

○　思いやりについて考える。

T：「思いやり」という言葉を聞いて、思い浮かぶことは何かを発表しましょう。

C：人に親切にすること。
C：優しい心。
C：困っている人がいたら、助ける。

展　開

○　「ぐみの木と小鳥」を読み、登場人物の気持ちを考える。

T：ぐみの木から、友達のりすが姿を見せていないことを聞いて、小鳥は、りすに対して、どんなことを思ったでしょう。

C：大丈夫かな。
C：元気はあるのかな。

T：りすが「だいぶよくなりました」と目に涙をためている姿を見たとき、小鳥はどんなことを思ったのでしょうか。

C：　よかったな。
C：　元気になってうれしいな。

T：りすとぐみの木は、小鳥が嵐の中をぐみの実を届けることをどう思ったのでしょうか。

C：　小鳥にけがをさせたくない。
C：　危ないから来なくていいよ。

T：嵐の中、りすやぐみの木の気持ちを考えたら、小鳥はどうしたらよかったのでしょうか。また、そう考えたのはなぜですか。

C：　嵐が止んでから行けばよかった。
　→りすやぐみの木に心配を掛けてしまうから。
　→小鳥がけがをしたら、届けられなくなるから。

T：この話では小鳥は無事に届けられましたが、必ずしもそうとは限らないね。ぐみの実を届けないことは思いやりではないのでしょうか。

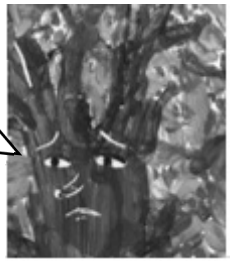
C：　相手のことを考えていたら、思いやり。

終　末

○　本時の振り返りをする。

T：今日の道徳の学習で、何が分かったかを書きましょう。

☆教材をスライドショーにして提示



スライドショーで提示しながら、教材の内容を伝えることで、文字を追うことが困難な子や集中が続かない子にも内容の理解を促すことができたり、学習に対して意欲を高めたりすることができました。

☆発問の工夫

○　「目に涙をためているくらいの気持ちとは、どんな気持ちなのだろう。」と補助発問をすることで、りすの感謝の気持ちに迫ることができました。
○　吹き出しを用いて、りすやぐみの木の気持ちをより表現しやすくしました。

☆子どもたちの記述内容

- 「助けてほしい」と口に出して言っていなくても、本当は助けてほしいと思っている人もいるかもしれないことに気が付きました。
- してあげることも思いやりだけど、やってあげなくても相手のことを考えていたら思いやりということが分かりました。
- 何でもやってあげるのも思いやりだけど、相手の将来のことなどを考えたら、相手が望んでいないなら助けないのも思いやりだと分かった。

【これから実践する先生方へのアドバイス】

本時のねらいに迫るためには、小鳥に対するぐみの木やりすの気持ちを掘り起こしていく必要があると考えます。その際、「小鳥」、「りす」、「ぐみの木」、「自分」と４つの視点が混在する状態となるため、登場人物の絵をペープサートにしておき、気持ちを考える対象となる人物を取り外して提示し、子どもたちが今、誰の気持ちを考えたらいいかを分かりやすくするとよいと思います。

【学級の子どもたちの実態】
自己中心的な考えの下、「親切だ」と思う行動をとってしまう

【学級の子どもたちの実態】
困っている人を見て見ぬふりをしたり、声を掛けられなかったりする

実践例②
主題名

あいてを思いやって

小学２年生
Ｂ 親切、思いやり

【教材名】　ぐみの木と小鳥（出典：きみがいちばんひかるとき ２年　光村図書）
【教材の概要】

山の上に立つぐみの木が小鳥に「りすがこの頃、姿を見せない」と話す。

⇨

ぐみの木に代わり、小鳥がりすの様子を見に行くと、りすは病気で寝ていた。小鳥は翌日もりすを訪ねる。

⇨

さらに翌日は、嵐の中、小鳥は力を振り絞り、りすにぐみを届けた。りすは感謝し、ぐみの木も、小鳥がしたことは忘れないと言う。

【学級の子どもたちの実態】
親切にすることや思いやりをもつことが、友達との関係を築く上で大切であることには気付いている。しかし、教室での生活に目を向けると、困っている子に対して見て見ぬふりをしたり、恥ずかしくて声を掛けることができなかったりと、親切や思いやりを行動に移すことはまだ難しい児童がいる。

【この教材でどのような心情を高めるか】
りすを心配して嵐を前に飛び立とうとする小鳥の姿からは、相手を思いやって行動するという温かい気持ちを感じ取らせることができます。その思いをより感じ取らせ、小鳥が嵐の中、りすの元へたどり着いた場面を動作で表現する活動を通して、小鳥が危険を冒してまでも、りすにぐみの実を届けた思いやりの心に気付くことができるようにします。

【本時のねらい】
病気のりすに、嵐の中でもぐみの実を届ける小鳥の姿を通して、親切にしたり、親切にされたりすると、どのような気持ちになるかを考えさせ、身近にいる人に温かい心で接し、親切にしようとする心情を育てるようにする。

【自分との関わりで考える工夫】

① 自分の考えを動作で表現する
小鳥が葛藤する場面で「じっと考えてから飛び立つまでの間、小鳥はどんなことを考えていたでしょうか。実際にやってみましょう」と問い掛け、子どもたちが考えた小鳥の思いを動作で表現するようにします。小鳥の思いに子ども自身の考えを投影して動作で表現させることで、小鳥の思いを自分との関わりで考えることができるようにします。

② 自分たちと登場人物の共通点を探す
導入で板書した「相手がうれしいと思うことをしたときの自分の気持ち」と小鳥が嵐の中、ぐみの実を届けたときの気持ちの共通点を探します。「授業の最初のみんなの気持ちと、小鳥の気持ちで似ているものはありますか」と問い掛けることで、教材の内容を他人事として捉えて終わるのではなく、子ども自身の中にも親切や思いやりの気持ちがあることに気付くようにすることができます。

【実践について】(C…子ども　T…教師)

＜授業の流れ＞

導　入

○　親切、思いやりについての経験やそのときの気持ちについて考えを出し合う。

T：相手がうれしいと思うことをした経験はありますか。そのときは、どんな気持ちでしたか。

C：お手伝いをした。お母さんが少しでも楽になってほしいと思った。
C：困っている友達に声を掛けた。心配で助けてあげたいと思った。

展　開

○　「ぐみの木と小鳥」を読み、親切や思いやりについて考える。

T：だいぶよくなったりすの様子を見て、小鳥はどんな気持ちになりましたか。

C：うれしい。安心した。
C：届けてよかった。
C：ぐみの木も安心すると思う。

T：じっと考えてから飛び立つまでの間、小鳥はどんなことを考えていたでしょうか。実際にやってみましょう。

C：ぼくが行かないと、りすさんの体調がまた悪くなってしまうかもしれない。行こう！
C：嵐の中、行きたいけれど、自分の身も危ない。怖いし、迷うなぁ。
C：りすさんが心配だ。きっとぐみの実を待っているに違いない。けど、早く嵐が止まってほしい。

終　末

○　自分たちがもっている親切や思いやりの気持ちについて考える。

T：授業の最初のみんなの気持ちと小鳥の気持ちで似ているものはありますか。

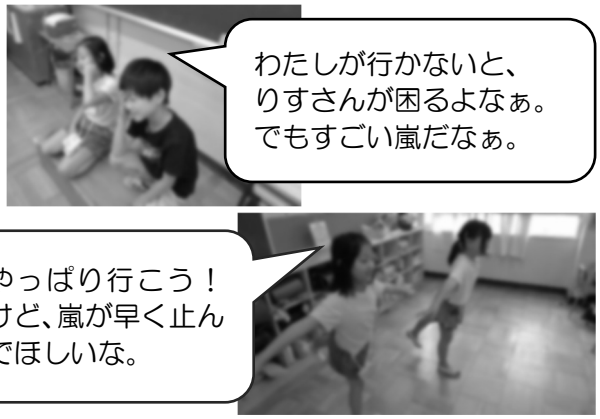
C：心配で助けてあげたいという気持ち。
C：相手の役に立ちたいという気持ち。
C：自分の身も心配だけど、何とかしたいという気持ち。
T：この中で自分が大切にしていきたい気持ちがあるといいですね。

☆自分の考えを出し合う

親切や思いやり、感謝、努力や家族愛などの子どもたちが日頃、身近に感じられる内容項目のときは、その経験を思い浮かべられるような発問をし、子どもたちがそのときのエピソードを語ることができるようにしました。

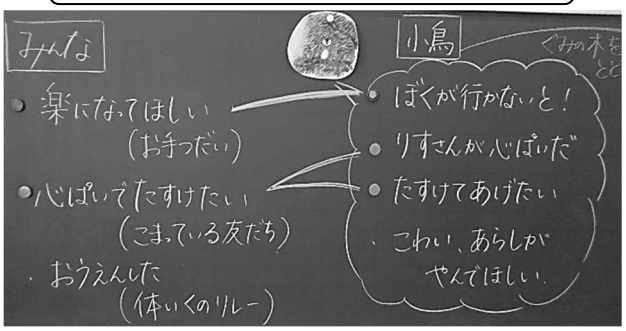
☆自分の考えを動作で表現する

子どもたちの中には、言葉だけでなく動きを付けた方が自分の考えを表すことができる子もいました。



その動作にした理由を問うよりも、その動作をしながらどんなことを考えているかを聞きました。過去に似たような経験をしたことがあるかを問うのも子どもたちが自分との関わりで考えるためには有効だと考えました。

☆自分たちと登場人物の共通点を探す



授業の初めに子どもたちに聞いた思いやりに関する発言と、小鳥の親切だと思うところを比べて、似ているところを探しました。他人事になりがちな教材の内容を、自分事として考えることができました。

【これから実践する先生方へのアドバイス】

低学年の実践は、身体を動かしたり、経験をどんどん語らせたりと45分間で様々な活動を取り入れて、楽しく授業を進めるとよいと思います。自分との関わりで考えさせるためには、登場人物の気持ちと導入の自分たちの経験をつなげる発問が必要です。導入では子どもたちの「親切や思いやり」の経験とそのときの気持ちを多く板書して、前向きな気持ちで授業を始めることがポイントです。

実践例③
主題名

親切とは

小学５年生
B 親切、思いやり

【教材名】　道案内（出典：きみがいちばんひかるとき ５年　光村図書）
【教材の概要】

「ぼく」と木村くんは、道に迷っているおばあさんに声を掛けた。

地図を描いてあげたが、しばらくして、おばあさんが、まだ迷っているのに気付いた。

その後、声を掛けた中学生が丁寧に案内している姿を見て、木村くんは、「親切が少し足りなかったのかな」とつぶやく。

【学級の子どもたちの実態】
学校生活の中で困っている人に手を貸したり、下級生に声を掛けたりすることはできている。しかし、そのほとんどは、友達や関わりのある人に対してだけの親切である。また、親切にしたいという思いが生まれた際、自己中心的な考えで親切にしようとするため、親切にされた側が、「本当はしてほしくなかった」とトラブルに発展する姿が見られる。

【この教材でどのような心情を高めるか】
「ぼく」と木村くんが、道に迷っているおばあさんに気付き、進んで声を掛け、道案内を行う姿から、「親切」という行為は、された方もした方も気持ちが良いものだということを感じ取ることができるようにします。さらに、中学生が行った親切と比較することで、「相手のことを考えた上での親切」が大切であることに気付けるようにしていきます。

【本時のねらい】
主人公と中学生が行った二つの親切を比較し、主人公がとった「親切」は、「本当に足りなかったのか」について考えを話し合うことで、自分が相手に対してどのように接し、対処することが相手のためになるのかをよく考えて行動しようとする心情を育てる。

【自分との関わりで考える工夫】Point

① ミュージックビデオを活用した導入と終末
ミュージックビデオに出てくる、席を譲るが断られるシーンの映像を見ます。断られた人へのアドバイスを考える中で、似たような経験を想起させ、主題に対する関心を高めることができます。また、終末でも同じ発問をすることで、授業の始めと終わりの考えの変容に気付き、これからの生活で大切にしたい気持ちを高めることができます。

② 話合いが活発になる発問と思考ツールの活用
「親切が少し足りなかったのかな」の言葉に着目して「本当に足りなかったのかな」と発問します。その際、自分の考えの表出方法を複数から選べるようにすることで自分の考えをもちやすくすることができます。その後、「足りている」「足りていない」の二つの立場から話し合えるようにします。同じ立場同士で話し合ってから、違う立場同士で話し合うことで、自分の考えに自信をもつことができ、話合いが活発になります。

【実践について】(C…子ども　T…教師)

＜授業の流れ＞

導　入

○　席を譲るが、断られる映像を見て、どのように声を掛けるのかを考える。

T：断られた人にどのようなアドバイスをしますか。

C：良いことをしたんだよ。自信をもって。

T：この人の親切は、意味のない親切ですか。

C：そうは思わないけどなぁ。

展　開

○　「道案内」を読み、親切について考える。

T：「やっぱり、いいことをした後は気持ちがいいなあ。」とうなずき合ったとき、ぼくと木村くんは、どんなことを考えていたでしょうか。

C：喜んでもらえて、うれしい。

T：まだ困っているおばあさんの姿を見たときは、どんなことを考えていたでしょうか。

C：親切にした意味がなかった。
C：イライラしている。

T：ぼくと木村くんの親切は、本当に足りなかったのでしょうか。話し合いましょう。

【足りていると感じる児童】
C：親切にする気持ちがまずは大事。
C：おばあさんも喜んでいたから。
【足りていないと感じる児童】
C：最後まで責任をとるべき。
C：相手の年齢を考えていないから。

T：親切にするときに大切なことは何でしょうか。

C：相手のことを考えて親切にすることが大切だと思った。
C：親切にするのはいいこと。けど、自分の考えばかりではだめ。

終　末

○　最初の映像をもう一度見て、どのように声を掛けるのかを考える。
C：あなたの親切は間違っていないよ。声を掛けることができたのがすごいよ。
C：親切にする時は、相手が今どういった状況なのか、どんな人なのかを考えるのも大事だよ。

☆ミュージックビデオを活用した導入

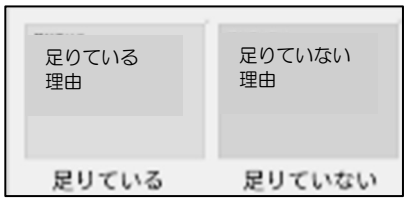
導入と終末で活用しました。子どもたちは、映像を一生懸命に見ていました。また、音楽を流したことで教室が温かい雰囲気に包まれました。

☆話合いが活発になる発問と思考ツールの活用

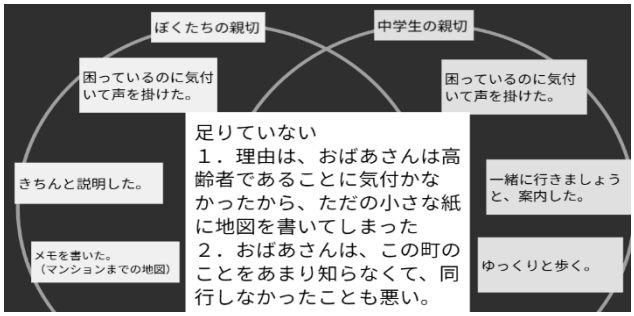
～考えの表出方法を選択式にする～

「色による考えの表出」

ピンク色の付箋を「足りている」青色の付箋を「足りていない」にして、理由を書くように伝えました。



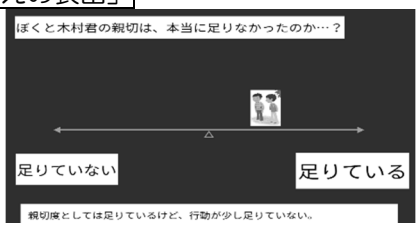
「ベン図による考えの表出」



「ぼく・木村君」「中学生」の二つの親切の具体的な行動を示した上で、足りているか、足りていないのかどちらかを選んで考えを書くようにしました。

「座標軸による考えの表出」

「足りている」「足りていない」を座標軸を用いて考えを記入し、理由も書くように伝えました。



～立場を分けた話合い～

ぼくと木村くんの親切について話合いを行いました。同じ立場同士で話合いを行った後、違う立場同士で話合いを行うと、自分の考えに自信をもって活発に話し合う姿が見られました。

【これから実践する先生方へのアドバイス】

導入では、今日の授業が楽しみになるような雰囲気づくりが大切です。映像を活用することで、子どもたちがわくわく感をもって学習をスタートすることができます。また、高学年になると自分の考えに自信がもてず、話合いの場面で黙ってしまう実態もよく見られます。そこで、立場に分け、同じ立場同士で話し合うことで、考えが一緒の仲間がいることを知り、自分の考えに自信が付き、違う立場同士の話合いも活発になることが期待できます。

実践例④
主題名

親切とは

小学５年生
Ｂ 親切、思いやり

【教材名】　道案内（出典：きみがいちばんひかるとき ５年　光村図書）

【教材の概要】

「ぼく」と木村くんは、道に迷っているおばあさんに声を掛けた。

地図を描いてあげたが、しばらくして、おばあさんが、まだ迷っているのに気付いた。

その後、声を掛けた中学生が丁寧に案内している姿を見て、木村くんは、「親切が少し足りなかったのかな」とつぶやく。

【学級の子どもたちの実態】

子どもたちは思いやりの心をもって、自分のよいと思うことを考え行動する姿が見られる。しかし、相手の置かれている状況を自分自身に置き換えて想像し、友達と関わる姿が少ない。例えば、相手が求めていないことを良かれと思って行い、トラブルになることがよくある。また地域社会における公共の場所などにおいても、大変な思いをしている人や悲しい気持ちでいる人にまで思いが至らず、自分本位で考えて、行動する姿が見られる。

【この教材でどのような心情を高めるか】

子どもたちは、おばあさんに対する中学生の行動を見た主人公の姿を通して、相手に応じた親切が大切であることには気付くと思われます。しかし、いつでも寄り添うことが親切というわけではなく、あくまで相手の状況や内面に応じて考えることが親切ということまで気付かせたいと考えます。そのためには、教材で考えたことからさらに、自分との関わりの中で、様々な状況や相手を想像させた上で親切について捉えさせていくことが大切です。

【本時のねらい】

道に迷っているおばあさんに親切にしようとした「ぼく」や中学生の姿を通して、親切な行いをするときに大切なことは何か考えさせ、自分自身が相手に対してどのように接し、対処することが相手のためになるのかをよく考えて行動しようとする実践意欲と態度を育てる。

【自分との関わりで考える工夫】Point

① 二つの立場に分かれる発問に対する話合い

親切についての発問に対して、「はい」の立場と「いいえ」の立場の２つの立場に分かれて話合いをします。まず、自分が選んだ立場と同じ立場の人と対話をし、その後さらに、違う立場を選んだ人とも対話をします。そうすることで、視点を変えて多面的・多角的に親切について考えることができるようにします。

② 問い返しを活用した終末

終末でさらに問い返しを行うことで、展開で話し合った内容について、教材についての話合いで出てきた考えとは、少し違った視点で子どもたちに考えさせます。例えば、

みんなの生活の中では、いつでもそういう考え方でよいのかな？

相手が違っていても、それが一番よい考え方ですか？

などと問い返します。そうすることで、子どもたちの考えが、教材の中だけに留まらず、より自分との関わりの中で、本時で学んだことを考えることができるようにします。

【学級の子どもたちの実態】
友達や関係ができている人以外と関わることには消極的

【学級の子どもたちの実態】
相手の置かれている状況を想像できず、自分本位の考えで行動してしまう

【実践について】(C…子ども　T…教師)

＜授業の流れ＞

導　入

○　最近行った親切について考える。

T：最近、みなさんの親切な行動をよく見ます！例えばどんなことでしょう。ちなみに、先生が最近行った親切は、○○です。

C：体育のとき、たくさん器具を運びました！

C：電車で席を譲りました！

展　開

○　「道案内」を読んで、親切について考える。

○　教材文の内容を確認する。

・「ぼく」と木村君は地図を渡した。

・おばあさんは読めずに困っていた。

・中学生がおばあさんを案内した。

・「何か足りなかった」という言葉を残した。

T：ぼくと木村君は、親切でしょうか。

＜同じ立場の相手と対話する＞

C：僕も木村君も親切心から行動してたね。

C：地図を描くなんて、普通できない。

＜違う立場の相手と対話する＞

C：むかっとした顔をしてたし、親切とは違う気がする。

C：いい結果ではなかったけれど、親切ではあるかな。

＜全員で話し合う＞

C：親切だけど、もっとできることはあるかも。

C：行動できることがすごい。

○　親切とは行動の結果生まれるものではなく、そうしたいという思いから生まれるものだが、相手の状況まで考えるのが、よりよい親切であることだと感じ取らせる。

T：今日の話から考えた親切は、みんなの生活の中で、いつでも必要な親切でしょうか。

C：あまり助けてほしくない人もいる。

C：自分なら、ほどほどの親切がありがたい。

T：では、親切とはどんなことなのでしょう。

C：相手のことをよく見て、よく知って考えることが親切だと思う。

○　本時に考えたことを記述する。

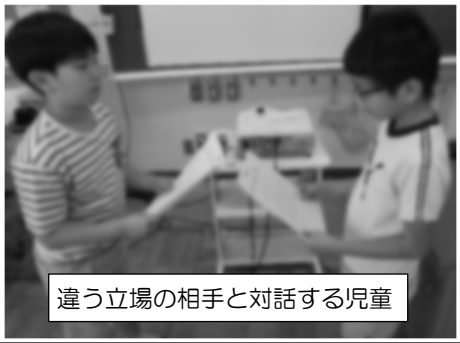
☆教師の経験を例として挙げる導入

導入では、自分たちが最近行った親切について考えさせます。初めに教師が、自分最近が行った親切の例を挙げることで、子どもたちが自分との関わりの中で経験を想起しやすくすると共に、テンポよく指名をしていくことで、発言しやすい雰囲気をつくることができました。

☆二つの立場に分かれた話合い

「ぼくと木村君は親切ですか」という発問に対して、「はい」と「いいえ」の二つの立場に分かれて話合いをしました。

まず、一方の立場を選ばせて、その理由を書かせます。その後、自分と同じ立場を選んだ人と対話し、その立場についての考えを深めることができるようにしました。自分とは逆の立場の人とも対話することで、親切についてより多面的・多角的に考えることができるようにしました。



違う立場の相手と対話する児童

☆問い返しを活用した終末

展開で話したことを基にして、「今日の話から考えた親切は、みんなの生活の中でいつでも必要な親切ですか」と、子どもたちに問い返しました。

子どもたちは、話し合った内容を自分たちの生活の中にあてはめながら、「あまり助けてほしくない人もいる」「親切にされるのを断ったけれど、実は心の中で助けてほしい人もいる」「自分だったら、ほどほどの親切のほうがありがたい」などと、発言していました。教材について話し合った内容から、より自分との関わりの中で親切について考えている様子が見られました。

【これから実践する先生方へのアドバイス】

２つの立場で話合いを行う際には、どちらかに意見が偏ったり、話合いの内容が平行線をたどったりすることなどが考えられます。その場合には、教師が立場を指定して、両方の立場の考えを出させたり、教師が人数の少ない側の立場に立って意見を出したりするなど、様々な方法を取り入れることによって、話合いが活発になり、子どもたちがより自分との関わりの中で、多面的・多角的に考えることができます。

教師が人数の少ない立場に立って対話する様子

Ⅳ　まとめ

（１）成果と課題

本部会では「自分との関わりで考える道徳科の授業―子どもの実態に基づいた発問と終末の工夫を通して―」をテーマに研究を進めてきた結果、次のような成果と課題が明らかになりました。

【成果（○）】

○　子ども観と教材観の書き方を改めて学び直したことで、子どもたちに身に付けてほしい力と教材で付けられる力を結び付けて授業の組み立てを考えることができた。そのため、本時のねらいを目指す授業展開を考えることができた。

○　模擬授業の際には、事前に授業者が学級の子どもの特徴や学級の雰囲気を説明し、授業の視点を明確にしておいたことで、子ども役の部員は説明された実態になり切って授業を受けて、授業の改善点を考えることができた。

【課題（●）と改善点（→）】

●　導入で教材の内容について確認をしたり、子どもたちから多くの声を引き出すために発問を二択にしたりする場面があった。しかし、気持ちについて考えることが難しくなり、教材から行動の理由を読み取る展開になってしまうことがあった。

→　教材の内容の確認は場面絵を用いたり、テンポよく確認したりして短時間で振り返ることが大切であった。二択の発問をするときには、一方を選んだ理由を話し合うことで、主人公の気持ちについても考えられるようにする必要があった。

●　実際に教室で子どもたちを相手に授業を行うときと教員相手に模擬授業を行うときでは、活動に掛かる時間が変わり、実際の授業のイメージをもちにくい場面があった。

→　模擬授業を行うことが目的とならないように、模擬授業は学習指導案の検討から事後検討までの一連の活動の流れの中に位置することを意識する必要があった。その中で、模擬授業の時間配分について想定したり、特に模擬授業で行いたい場面を選んだりと活動の精選を行う必要もあった。

＜部員の声から＞

道徳科における児童の実態の把握の仕方や選んだ教材でどのような力を付けさせるのかを考えることなど、授業づくりの基本を見直すことができました。

児童の姿をイメージしてグループのみなさんと発問や授業の工夫を考えていく時間がとても有意義に感じました。経験ある先生方から過去の実践についての話を聞けたこともありがたかったです。

（２）今後の方向性

本年度は、「自分との関わりで考える道徳科の授業―子どもの実態に基づいた発問と終末の工夫を通して―」をテーマに、道徳科における、子どもの実態により応じた授業の作り方の研究を進めてきました。次年度は、さらに子どもの実態を細かく把握し、持ち寄って分析し、子どもたちがより自分との関わりで考えられる発問を授業で投げ掛けていけるように、部員一同で学んでいきたいと思います。

本年度のあゆみ

月	日	授業づくり研究部会	テーマ研究部会	合同学習会
5	9	研究部員総会		
5	17	子どもに問題意識をもたせる導入について話し合おう	道徳科の目標を確かめよう	「先人の伝記」を題材とした道徳科の授業
6	9	問題意識を生かした議論の広げ方について考えよう	教材と子どもの実態とのつながりを考えよう	「自己を見つめる」導入の工夫
7	5	公開授業指導案事前検討（両部会合同）		「多面的・多角的に考える」展開の工夫 「自己の生き方についての考えを深める」終末の工夫
9	6	問題意識をもって考えられる指導案か検討しよう（模擬授業形式）	定番教材で発問を考えてみよう	「感動、畏敬の念」を題材とした道徳科の授業
9	27	実践を振り返り、成果と課題を見付けよう	定番教材で発問を考えてみよう	「詩」を題材とした道徳科の授業
10	17	公開授業事前検討会（授業者による模擬授業）		
10	24	授業づくり研究部会　授業研究（公開授業）		
11	1	公開授業事後検討会		「国際理解・国際親善」を題材とした道徳科の授業
12	12	道徳科の授業を進めるうえでの悩みを解決しよう	道徳科の授業を進めるうえでの悩みを解決しよう	「スポーツ」を題材とした道徳科の授業
1	10	研究発表会の準備	研究発表会の準備	「自然」を題材とした道徳科の授業
1	16	研究発表会リハーサル		
1	23	研究発表会		
2	14	来年度の実践に向けて話し合おう	今年度を振り返って	地域教材（明るい心）を活用した道徳科の授業

※　1月以降については、予定が掲載されています。

あ　と　が　き

本会報を手に取っていただき、ありがとうございました。掲載した実践はいかがでしたでしょうか。「道徳科の授業で生かすことのできるアイデアや工夫がたくさん詰め込まれていた」「さっそく実践してみたい」と感じていただけたら幸いです。

今年度は「授業づくり研究部会」も「テーマ研究部会」も「模擬授業」を大切にして部会運営を行ってきました。子どもたちの実態から授業のねらいや発問を考え、模擬授業を行った後、良かった点や改善点について話し合い、実際の授業に役立てるという流れです。また、両部会が集まって行われる「合同学習会」でも、模擬授業を通して様々な手だてが紹介されました。研究会の活動のどの場面でも、参加した先生方が真剣に考え、いきいきとした表情で話し合い、高め合う姿が見られました。そして、部会が終わった後は明日からの授業が楽しみになる…。まさに、学習指導要領でねらう「主体的、対話的で深い学び」の姿を教師である私たちが体現しているように感じました。研究会の熱量が、この会報を通して皆さんに伝わることを願っています。そして、校内の先生方に紹介していただき、多くの先生方に活用していただければ、この上ない喜びです。また、本会報を読んで名古屋市道徳研究会の活動に興味をもっていただけた方がいらっしゃいましたら、ぜひご連絡ください。一緒に「道徳」について学んでいきませんか。

最後になりましたが、本研究会に対しまして、格別のご指導、ご支援を賜りました先生方、並びに各関係機関の皆様に心より感謝申し上げます。また、本会報を発刊するにあたり、実践並びに執筆にご尽力いただいた先生方に敬意を表するとともに、厚く御礼申し上げます。

名古屋市道徳研究会委員長

名古屋市立桜小学校　　山部　あゆ

会報作成協力者

【授業づくり研究部会】

部　長　根本　貢太（庄内小）
副部長　水谷　祐基（柴田小）
部　員　豊田　昇平（春岡小）
森本　和良（なごや小）
畠山　靖弘（平田小）
勘角　亮（新栄小）
三澤　裕紀（御器所小）
吉川　慶（戸田小）
静谷　公希（戸田小）
小島　早織（柴田小）
下平　剛大（守山小）
岩嶋　敏也（守山小）
駒田　麻子（志段味東小）
二村　朋美（平子小）
久野　嘉子（平針南小）

【テーマ研究部会】

部　長　土屋　俊貴（八社小）
副部長　大江　伸俊（東港中）
部　員　田中　清彦（上野小）
藤井　真帆（富士見台小）
伊橋　諒（白山中）
池内　秀幸（川原小分校）
倉屋　玲樹（旗屋小）
岡田　夏実（豊治小）
青山　拓也（万場小）
真田　幹弘（高木小）
石坂　直也（当知小）
新田　裕樹（白水小）
宮原　宝（苗代小）
江口　観世（守山西中）
荒木　夕賀（守山西中）
大島　佑太（緑小）
舘　勇佑（上社小）
廣野　良明（大坪小）
三宅　祐介（平針北小）